

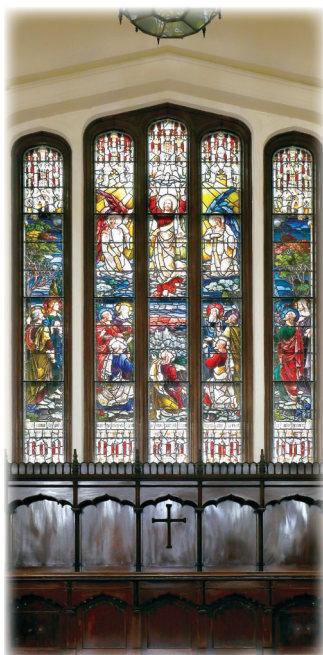
水曜通信25

東北学院宗教センター編

2023年
2月

第60回 水曜公開礼拝

2023年2月15日(水) 18:30 - 19:00



説教：鐸木 道剛（理事長特別補佐(宗教センター担当)）

奏楽：山司 恵莉子（礼拝オルガニスト）

<礼拝次第>

前 奏：J.S.バッハ作曲

「いと高きところでは神にのみ栄光あれ」

BWV 676

（クラヴィーア練習曲集 第3部）

讃美歌：198番 「ちちみこみたまの」

聖 書：コリントの信徒への手紙Ⅰ 13章8～13節

讃美歌：310番 「しずけいのりの」

説 教：「信仰・希望・愛」

頌 栄：539番 「あめつちこそりて」

後 奏：J.S.バッハ作曲

フゲッタ「これぞ聖なる十戒」 BWV 679

（クラヴィーア練習曲集 第3部）

後奏の後、山司 恵莉子（礼拝オルガニスト）のオルガン演奏による賛美を行います。

次回第61回水曜公開礼拝は2023年4月19日です。

第59回 水曜公開礼拝報告（説教：大西 晴樹、奏楽：渡辺 真理）

2023年1月18日（水） 18：30-19：00

讃美歌：452番 「ただしきよくあらまし」
聖書：マルコによる福音書 4章30節～32節
讃美歌：234A番 「むかし主イエスの」
説教：「シュネーター先生とその弟子たち」
頌栄：542番 「よをこぞりて」



【説教要旨】

D.シュネーター東北学院第二代院長は、「基督教教育総合方針」（1917年）において、キリスト教教育の目標を国公立学校の補完でなければ、改宗教育でもなく、「certain type of men」 「確かな人間」の育成だと述べました。本学で開催された映画「ヒゲの校長」上映会において私は目からうろこが落ちるような発見をしました。シュネーター先生の教えを受け、大阪聾唖学校で働いた高橋潔ら東北学院出身者たちは、口話法を推進する文部省や全国聾唖学校校長会に反対して「心の教育は手話でなければならない」と述べ、聴覚障がい者の適性を配慮して手話法を併用し、現在では手話法が一般化するまでになりました。シュネーター先生が教えた「確かな人間」たちとの出会いです。（院長・学長 大西 晴樹）

前奏：J.P.スヴェーリク作曲 「天にまします我らの神よ」
後奏：J.P.スヴェーリク作曲 「いと高さ神にみ栄えあれ」

スヴェーリクはネーデルラント鍵盤楽派を代表するオランダの作曲家です。対位法の複雑さや洗練、とりわけ対主題やストレット、連続音の用法において、バッハを予期していると言えます。また教育者としても、シャイトやシャイデマン、プレトリウスら、多数の優秀な音楽家を育て、100年後のバッハの音楽へと繋がるのです。

前奏は主の祈りのコラール「天にまします我らの父よ」から第1 & 第2変奏を。後奏の「いと高さところに栄光あり」はいわゆるグローリア。イエスの誕生に際し天使が羊飼いに話した賛美の言葉をもとにしています。（礼拝オルガニスト 渡辺 真理）



礼拝とその後の19時00分から30分までの渡辺真理氏によるオルガンによる賛美に30名の方が参加されました。

礼拝後、音楽による賛美（オルガン独奏：渡辺 真理）

1. J.S. バッハ作曲 「装いせよ、我が魂よ」 BWV654
2. J.ブラームス作曲 「我がイエスよ、汝は我を永遠に」 Op.122
3. R.シューマン作曲 「カノン風小品 No.6」 Op.56
4. F.メンデルスゾーン作曲 「前奏曲とフーガ第3番二短調」 Op.37

J.S.バッハの「装いせよ、我が魂よ」はマタイ福音書22章1～14節に由来するライブツィヒコラールの大変美しい装飾コラールです。

続くブラームスの「我がイエスよ、汝は我を永遠に」はマタイ9章15節に歌詞を持つコラールで、ブラームスが晩年、尊敬するバッハの形式と書法を用いた11曲から成るコラール集の第一曲目です。

そしてシューマンの「カノンNo.6」一生涯バッハを勉強し続けたと言われるシューマンは、オルガンのような足元鍵盤のついたペダル・ピアノがお気に入りだったらしく、この作品もペダルピアノ用の練習曲の一つです。

最後のメンデルスゾーンは、バッハの死後、世から消えていたバッハ作品をマタイ受難曲の演奏にて復興させた事でも有名で、彼のミサ曲やオルガン曲にはバッハの影響が見られます。この「前奏曲とフーガ第3番」は即興的な前奏、力強い音色のフーガから成っています。

今回は敬愛するバッハの影響を受けた、ドイツロマン派の作曲家の作品を取り上げてみました。

（渡辺 真理）



宗教改革者カルヴァン（5）16世紀ジュネーヴ 民主主義の始まり？

16世紀の宗教改革期におけるスイスのジュネーヴでの社会的な変化や改革について語ってきましたが、今回は政治の話をしていきます。1536年5月25日に独立したジュネーヴは、きわめて民主主義的な傾向をもつ政治体制を築きました。それまで南に広がるフランスのリヨンの司教がジュネーヴの君主として統治していましたが、16世紀になると西ヨーロッパの幾つかの都市が宗教改革を行って独立していく様子に刺激され、ジュネーヴ市民も決起して宗教改革を導入し、リヨンからの独立を勝ち取りました。もともと、最初期にはジュネーヴの指導者たちは福音主義に立脚するプロテスタント信仰を本気で受け入れたのではなく、独立を勝ち取る方便にしたと言えます。

市の行政は、25人の小議会、200人の大議会、市民総会で組織され、4人の長官（Seigneur）を指名制によって全市民で選びました。行政上の多くの規則が定められ、他方教会も「ジュネーヴ教会規則」を始めとして秩序ある法の下で、プロテスタントの信仰を告白する全市民の信仰教育と維持のために奮闘しました。城塞で囲んだ市内を四つのブロックに分けて、各地域の教会でほぼ毎日礼拝を実施し、全児童にキリスト教教育を施しました。

ところでジュネーヴ共和国（Civitas Geneva）は民主主義の嚆矢かという議論に関しては欧米では多様な意見があり、なんとも言えません。それにしても中世末期カトリック・キリスト教一色の西ヨーロッパにおいて、プロテスタント・キリスト教の登場は多方面に新しい変革をもたらしました。（宗教センターチャプレン 野村 信）



Serment du 21. mai 1536
Adoption de la Réforme par le Conseil
General Genève

一 建築が語る東北学院の歴史（16）

東北学院中学校・高等学校に、旧校舎（東二番丁）の北門として使用されていた門柱が4本保存されています（図1,図2）。しかもこの門柱は、1905（明治38）年、同地に普通科校舎（ドイツ建築家G.デ・ラランデの設計による）が新築された際に、その正門として建造されたものと伝わります（図3）。そこで2022年12月、機会を得て、これらの実測調査を行いました。

4本の門柱は、長いものと短いものが2本ずつとなっています。石種は白色を基調とする花崗岩（御影石）で、土樋キャンパスの礼拝堂の基礎（茨城県産）とも似た色味を持っています。断面はほぼ正方形のシンプルな形状ですが、柱頭部に鉢巻状の造形が施され、頂部は中央が僅かに窪んだ曲面状に加工されています。加工は非常に丁寧です。また、すべての石材に1面だけ接着されていた痕跡があり、長いものと短いものを貼り合わせて（複合柱）用いていたのを見て取れます。こうした所見と古写真（図3）の外形を重ねて見ますと、これらが明治38年に竣工した普通科校舎において、主門を吊っていた一対の門柱である可能性は極めて高いと考えられます。

（工学部 崎山 俊雄）



図1：保存されている4本の門柱



図2：埋め込まれた校名標
（加工痕より後補と分かる）



図3：明治38年建設の普通科校舎
（東北学院史資料センター所蔵写真をトリミング）

宣教師たちの生涯と思想（1）テーマ紹介

大学宗教授主任の藤野雄大です。僭越ながら今月から約10回にわたって連載を担当することになりました。テーマは、我が東北学院に関係の深い合衆国改革派教会の宣教師たちの生涯と思想についてです。本学は、三校祖のホーイ先生やシュネーダー先生以外にも、数多くの宣教師たちに支えられてきました。しかし、その生涯や思想については、これまであまり注目されてきたとは言えません。この連載では、そのような（マイナーな？不遇な？）宣教師たちの生涯を振り返ると共に、その思想（特にキリスト教や日本に対する理解など）について、彼らの論文やエッセイを紹介しつつ、理解を深めていきたいと思えます。これから、しばらくの間よろしくお願ひします。

（大学宗教授主任 藤野 雄大）

美術による賛美（19）肖像画の誕生



ミイラ肖像画「少年」
100-120年頃 縦24cm
大英博物館

左はエジプトのミイラに付けられていた絵で、布に蠟の絵具で描かれています。大英博物館から運ばれて日本で展示されたことがあります。そのとき、この展示の前で「怖い」と言っていた若い女性たちがいました。正しい反応です。「怖い」と感じるのは、この絵が生きていると思うからです。そもそもお墓の奥深く置かれて、親族のみが近づけたものです。美術館で展示するようなものではありません。

旧約聖書はそういうエジプト人の自然な感受性を否定しました。いわゆる偶像崇拜の否定です。モーセの十戒に記されていて、詩篇にも記されています（135編）。旧約聖書は生きているとってしまう人間の像を生きていないと言い切っているのです。世界は被造物で、生きていない。虚しいのです。

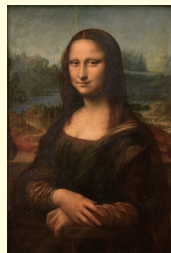
しかし先があります。新約聖書では、神様が人つまり被造物となり、それによって、被造物である物質世界は聖化され肯定されたのです。そして神様の肖像画が可能となりました。それでもやはり旧約聖書に従って、肖像画は被造物で、生きていない「もの」であることに変わりはありません。絵はいくら本物そっくりで生きているように見えても、あくまで「もの」です。そのことが確信できて初めて近代の肖像画が可能となります。

そのことが確信できて初めて近代の肖像画が可能になります。肖像画がどれほど本物そっくりでも、もう怖くありません。だから、本物そっくりに描くために油絵具も発明されました。その最も有名な成果が「モナリザ」と言えるでしょう。

（理事長特別補佐〈宗教センター担当〉 鐸木 道剛）



イコン
「イエス・キリスト」
板に蠟画
6世紀 84×45.5cm
シナイ山 カタリナ修道院



レオナルド・ダ・ヴィンチ
「モナ・リザ」
板に油彩
1503-19年 77×53cm
パリ ルーヴル美術館



いのち ひかり あい

東北学院スクールモットー
LIFE LIGHT LOVE (いのち・ひかり・あい)

東北学院宗教センター編「水曜通信」
第25号

2023年2月3日発行

〒980-8511 仙台市青葉区土樋1-3-1

発行責任者：宗教センター主任 原田 浩司

東北学院宗教センター TEL：022-264-6558

Email：c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp